

牧師、バイカー、鮫職人として。。。シェア from LA 第51話 「ロン追悼、①長く険しい日々」

沖縄出身のウェイトレスの道子さんは誰にでも愛される人。鮫店ではマネージャーを務めたこともあり客からも従業員からも慕われる。彼女は沖縄基地にいたロンさんと出会い結婚し渡米。あれから20年以上が経ち3人のお子さんに恵まれた。いつも夫婦円満で、たまに店に顔を出すロンさんも従業員の人気者。しかし突然の悲劇が彼を襲った。ステージ4の胃ガンと診断されたのだ。今から約10年前、鮫職人をしながらの宣教で最も長く険しい闘いが始まった。

痛みを我慢して病院へは行かず、重症化した後の発見という典型例だが、すぐにキモセラピー（抗がん剤治療）に入り厳しい闘病生活が始まった。今にして思えば、彼はステージ5に限りなく近いステージ4だったに違いない。1度のプログラムで数カ月を要するキモセラピーでコロコロに太っていた彼は見る見る痩せていった。副作用、不眠、食事制限とお決まりのコースを進み普段の生活は全く奪われた。しかしこの段階では彼が死ぬなどは誰も思っていなかった。私以外は。。。。

それでも私はひたすら祈りに没頭し、ロンの癒しと救いを祈り、店で道子さんに会う度に福音を伝えようとした。「教会に来れないならこちらから伺う」とも。しかし彼女は全く首を縦に振らない。「3分でいいから」といってもダメ、最後には「お祈りだけでもさせて欲しい」と言っても何やかやと断られた。時間だけが過ぎて行きあつという間に10ヶ月が経った。絶望的な無力感に襲われ、私は神に向かって叫んだ。「とにかく彼に合わせて欲しい」と。そして彼に福音を伝えるチャンスをくれと。。。。

そうしたある日、何と道子さんが非番の日にロンと娘、友人を伴って鮫屋に現れた。キモセラピーが一定期間終了し外出許可が出たのだ。私の胸は高鳴った。主に感謝しつつロンとようやく話が出来ることを喜んだ。しかし彼は福音に関して全く関心を示さず、一応「ありがとう」と言ってくれはしたものの飯を食うだけ。「何かあればいつでも呼んでくれ」と声をかけて見送るだけに終わった。他方、道子さんもロンが少し回復したのを見て「もう大丈夫よ！」などと言い出した。

嫌な予感がした。重病であるにもかかわらずゴスペルを頑なに拒否する人はが良くない結果を招くのを見て来たからだ。そして案の定この後すぐにとんでもないことが起こった。長く険しい日々が一気にピークへと突き進み、イエスに従う者が「自分の十字架を負いイエスについて行く」という意味を嫌と言うほど思い知らされることになる。。。。

**「誰でもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、
自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」 マタイの福音書16章24節**

